日本との戦争について、あるオーストラリア人のディスチャージ

2006年11月初めにオーストラリア ニューサウスウェールズ州シドニーで開かれた「平和を築くために、戦争の傷を癒す‥」というジュリアン・ワイスグラス[1]のワークショップに参加しました。私にはワークショップの通訳者をサポートするという、珍しい仕事を割り当てられました。珍しい、というのはオーストラリアのワークショップで通訳者を起用したのが初めてだったからです。やりなら学ぶ、という仕事でした。基本的には通訳者と仲良くなって、クラスの間は一緒に過ごし、通訳している間は一緒に横に立って通訳に注目してあげることでした。オーストラリア独特の言い回しが出たら標準英語に直してあげる、と私たちが通訳の通訳をするような場面もありました。

この仕事は楽しくて興味深かったと同時に光栄な役割でした。これからもいつでも喜んでやりたいと思います。ワークショップ全体が二ヶ国語で進められたことは興味深く、通訳をする人たちと知り合いになれたことは嬉しいことでした。そして、私たちのサポートが通訳者の助けになったことが私にもわかりました。また、ワークショップがすべての人に開かれた場（インクルーシブ）であったことが日本人の参加者にとって有効だったことも実感できました。アライである白人の私にとっては、有色人の人たちが大切に扱われているのをみることが「コントラディクション」[2]でした。

日本からもワークショップに参加してくれたことが嬉しかったです。日本人と私たちが敵同士で戦った戦争からの傷を癒し、平和を築こうというコミットメントが日本人にもあることがわかりました。それは事実としてわかってはいましたが、わざわざオーストラリアまで来てくれたことがその証であるように感じられたのです（日本で同様なワークショップがあればぜひ行きたいです）。日本人の話を聴いたり、戦争がどのようにその人々や家族に影響したかを理解できてよかったです。日本人が参加してくれたこと、戦争が認識されたことにより、私はより深くディスチャージできたと思います。

私の父は第二次世界大戦の帰還兵です。ニューギニアのココダ・トレイル、サナナダ、ゴナ、ブネに出兵しました。ニューギニア戦線の末期に行きましたが、600名の大隊のうちわずか89名のみが生還しました。戦死率が高い理由には戦闘だけでなく、栄養失調、マラリア、赤痢などが蔓延する厳しい状況であったこともあります。

数年前あるワークショップで、戦争に行った親をもつ人々のためのトピックテーブルがありました。その時に、この分野について考えることが私には重要であると気づきました。2年前オーストラリアで開かれたプレ世界会議ではヨーロッパで開かれた第二次世界大戦の傷を癒すワークショップの話を聞き、感動しました（たくさんディスチャージしました）。

帰還兵の子どもであることについてセッションするうちに考えが混乱してきました。他の人の多くは帰還兵の父親による子どもに対する暴力を経験していましたが、私の父は一度も暴力を振るうことがありませんでした。そのため、戦争が私たち一家にどのような影響を及ぼしたのかがよく見えなかったのです。なにも影響はなかったんだ、とも思いました。しかし、今になって、そうではないことがわかりました。オーストラリア社会全体にも当てはまりますが、私に戦争が及ぼした影響は奥深く、多面多様なのです。

ワークショップの後、オーストラリアが派兵したニューギニア戦線についての本を読むことを決めま

した。これは、定期的にその決意についてセッションしたからこそ実行できたのです。そこでわき起こった気持ちや考えを次に書きます。

- 恐怖心
- 人種差別
- 戦争が信じ難い狂気であるという驚き
- 戦場から遠く離れた軍上層部がオーストラリアの前線をおろそかに扱っていたことを知った怒り
- 国家意識
- 暴力行為や殺人が「英雄行為」として祭り上げられたことに対する憎悪感
- 人の命が失われたことに対する深い悲しみ、自分の父親が人を殺したかもしれないと考えることからくる驚き
- 昔のことで今の時代には関係ない、今はみんな平気、私には何の関係もない、などの感情（「寝た子は起こすな」、「パンドラの箱を開けるな」[3]、「古傷はいじるな」など）
- 感覚なし － 2回ぐらいセッションして初めて本の表紙の写真にあった若者の表情がどんなに恐怖に満ちているかに気づいた

効果があった「方向性」のいくつか：

- カウンセラーに本の一部を読んでもらう
- 本に掲載された写真をじっくり見る
- 「戦争に触れちゃだめ」という決まり文句をくり返す（たくさん笑いが出ました）
- 本から学んだ内容について話す
- 戦争に関する昔の記憶をもう一度見直す
- 父の戦争での役割について話す
- 日本軍について聞いた話からわく恐怖心をディスチャージする
- 「決して忘れません」

戦争についてのディスチャージはアクセスしやすく、強烈なものでしたが、しばしば、これ以上考えたくない‥、という点に達しました（このような時に「戦争なんかどうでもいい」という感情がわき起こります）。ほかのテーマよりも、戦争についてのセッションをした時の方が、セッション後のア

テンションが深まったように思われます。

（戦争について読んだ内容が私の人生の他の出来事をどの程度再刺激してディスチャージしているのかはわかりません。）

子どもの頃、私の家では空気が「戦争」で満ちていたことに気づきました。在郷軍人に囲まれ、私を取り巻いたほかの人々にとっても戦争は身近な記憶でした（私は 1960 年生まれです）。戦争に関するさまざまな言い回しを記憶していますが、いつどこで聞いたかは思い出せません。だから、とても幼い頃に聞いたのだと思います。私にはどこで聞いたかは思い出せないけれど、という知識がたくさんあるようです。

忘れていたこともたくさんあります。20 年前に私が書いた日本の戦争映画の批評を見つけました。当時批評したほかの映画は覚えていましたが、この映画についてはすっかり忘れていました。ワークショップ後、軍隊経験について父（93 歳）に尋ねましたが、前に聞いたのにすっかり忘れていた話や、私の中で出来事の時系列（父がどこにいて、戦争何年目だったか）があやふやだったことに気づきました。私が子どもの頃には、「お父さんにそんなこと聞いちゃだめ」、「あまりにつらすぎるから」、「お父さんの気に障るから」など言われ、「戦争について触れちゃいけない」というのが現実だったのです。けれど私が質問し始めると、父はとても話したがっているのに気づきました。父は何度か自分で口実を設けては、話し出すようになり、母も熱心に話しました。

子どもの頃父が戦争の話をしたがらなかったのは、人間が人間に対しどんな醜い仕打ちをすることが可能なのかを子どもに知らせたくなかったのかもしれません。父は人間が本質的には善であるという考えには懐疑的で、それは今でも変わりません。本人も認めています。けれど人間は善である、人類はみな平等である、という強い信念を植えつけられて私は成長しました。

一時、父は地元の復員軍人協会（RSL）クラブの会長を務め、戦死者の遺族援助機関であるレガシーというボランティア団体にも深く関わっていました。在郷軍人問題でリーダーシップをとるそんな父の姿を私は誇りに思いました。

オーストラリア人にとって第二次世界大戦、特に日本との戦いについてディスチャージすることがオーストラリアのアイデンティティ、国家意識、対米不信感（太平洋戦線は米国主導で、多くの米兵がオーストラリアで上陸休暇をとりました）について考える鍵だと思います。オーストラリアでは若者でも戦争についての「傷のパターン」を周りから吸い込んでいることと思います。

12 歳の息子を持つ私が、戦争についてディスチャージしなければならないもうひとつの理由は、男の子を対象とした数多くの娯楽作品に暴力が描かれている点です。大人が戦争について十分ディスチャージをしなければ暴力的な内容に対して無感覚、無関心になり、男の子が暴力的なゲームや映画に湧かせる興味についてよく考えたり対応することができません。戦争について何度かセッションした後、息子と普段は楽しく見ていたアクション映画を見た時に、暴力が私の目に異なって映りました。映画を面白がるのではなく、「これは見過ごしてはいけない、これは娯楽ではない」と思ったのでした。

また、日本人に対するオーストラリア独自の人種差別をディスチャージすることも大切です。これは

「プレゼントタイム」4月号の誌面でティムが述べていた「人種差別の対象にされる集団ごとに特定化された人種差別がある」という考えに当てはまるものです。

日本とオーストラリアは経済的に深いつながりがあり、オーストラリア人は日本文化に高い関心を持っています。しかし、日本人が「敵国人」であったのはつい最近のこと。私の親の世代まではアジア人（主に中国人）を差別視するよう感化されていましたが、戦争によって日本人に対する独特の「傷」が人々の間に植えつけられました。60年代、70年代に育った私にとって第二次世界大戦の記憶は比較的新しく、私も日本人に対する差別意識を取り込んだに違いありません。それには日本兵による残虐行為について耳にし、そこで植えつけられた恐怖心があります。私の住んだオーストラリアの田舎では、日本人に限らずアジア人の姿は実質的に皆無でした。そこでは、アジア人が生身の人間という実感はありませんでした。

初めて広島･長崎の話[4]を聞いた時、原爆投下が間違っていることや日本人も人間であることを感じることは難しくありませんでした。米軍が原爆投下しなければ戦争は終わらなかったし、そうでなかったらオーストラリアは日本軍に侵略されていた、と言う母と口論をした記憶があります（ワークショップまでは東京を初めとする日本各地の焼夷弾空爆[5]については知りませんでした）。

白人オーストラリア人の人種差別のもうひとつの面として日本文化へのあこがれがあります。西洋の主流派が日本文化を解釈するにあたり、戦争や暴力に関連した伝統的側面に傾倒する傾向があることに気づきました（たとえば映画「ラストサムライ」）。それは、日本人が野蛮であるという先入観を鵜呑みにし、日本人に対する恐怖心を募るものです。

日本とオーストラリアの人々の間で人間的な関係が再生されていることに気づくことは嬉しいことです。私はオーストラリアNSW州中部のカウラという田舎町の近くで育ちました。戦争中、そこには戦争捕虜収容所があり、イタリア、朝鮮、台湾、日本の兵隊が収容されていました。1944年8月に1000名近くの日本兵捕虜が脱走し、231名が殺されたり自害しました。オーストラリア側は死者4名でした。（民間人は殺さないと捕虜側は決めていたのです。）地元の人々はその出来事に衝撃を受け、その約30年後に日本とオーストラリアの和解の象徴と、戦没慰霊のために日本と共同でカウラ市に美しい日本庭園を作りました。1964年にはカウラ事件やオーストラリア領地で戦没した日本兵の墓地が建てられ、日本とカウラ市は前向きな関係作りと文化交流を続けています。

ワークショップを発案リードしてくれ、私の個人史における中心的な出来事について、ついにディスチャージするきっかけを作ってくれたジュリアンに感謝したいと思います

1. 世界変革の国際照会者(ILRP)

2. 傷の経験と、いま存在する「現実」とが異なることに注目させるために用いる見方や、それを表現するための言い回しや行為

3. ギリシャ神話に登場する女性パンドラに神々から贈られた箱。開くことが禁じられていたが、好奇心に勝てず箱を開けたため、次々に人類に災いがもたらされるようになった。

4. アメリカ合衆国が日本の広島（1945年8月6日）と長崎（1945年8月9日）に原子爆弾を投下したこと

5.　太平洋戦争中、日本全国の大空襲で 50 万人の一般人が命を落としたと言われている

An Australian Discharges About War with Japan
Jill Sergeant
プレゼントタイム2007年7月号、11 - 16ページより
翻訳 白石　理恵

この文章の著作権はラショナルアイランド社にあります。（翻訳文２００７年。原文２００７年）。
この翻訳はあくまで草稿として扱ってください。